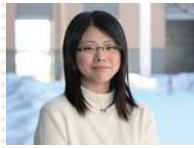


大自然を堪能。移植した自生植物で地域を彩りたい



生物生産学科 / 青森県立青森南高校
就職先・青森県庁 (林業)
大谷 理嘉 さん

幼い頃から自然に触れることが好きで、農大出身の父の影響もあってオープンキャンパスに参加。恵まれた自然に一目惚れしました。一人暮らしは不安でしたが、それは新入生の誰もが同じ。寮仲間の結束は固く、調味料の貸し借りも気軽にできる間柄です。北海道自然探索部では、昆虫採集や植物観賞、魚釣りや天体観測などを堪能。憧れていた植物資源保全学研究室にも入室でき、国道沿い斜面の緑化プロジェクトでは、移植したエゾスカシユリの生育調査を担当しました。開花まで何年か必要な自生種ですが、オレンジ色の大きな花が周囲を鮮やかに彩ることを期待しています。地元青森での就職も決定。森林整備や林業の活性化などを通して、地域の人に喜ばれる豊かな県づくりを担いたいです。

自分を成長させてくれた北海道に少しでも恩返しを



アクアバイオ学科 / 東京都立大島海洋国際高校
就職先・津軽海峡フェリー株式会社
清水 克樹 さん

水産系の高校で甲殻類に興味をもち、その研究の第一人者に憧れたことがここに来た理由の一つ。写真や列車が好きで、雄大な自然に対する憧れもありました。YOSAKOIソーラン同好会、北海道自然探索部、写真サークルに所属したほか、地域の町おこし団体や合唱団にも参加。幅広い方と交流を深め、物事を多角的に見られるようになりました。水産増殖学研究室では、気仙沼の干潟における生物と多様性の変化を調査。地盤沈下によって生じた干潟の生態系を調べ、復興への活用法を考察する前例のない研究です。就活は北海道を中心に、フェリー会社へ。北海道新幹線と組み合わせ、津軽海峡周遊の新たな観光ルートを活性化させるなど、自分を成長させてくれた北海道に貢献したいです。

緑の大地、満天の星空、多様な生物。北海道と聞いてイメージする風景が、ここにある。「この場所で4年間を過ごしたら、大きな人間に成長するだろうな」と予感させられる、広く美しいキャンパスだ。実は、同キャンパスで学ぶ学生の9割近くは関東を中心とした道外の出身。ほとんどの学生が、ある種の覚悟のもと見知らぬ土地にやってきて、一人暮らしを始めたことになる。不安は等しく同じ。頼るべきは友人や先輩。だからこそ自宅で夕食に招きあうなど濃密な人間関係が築かれていく。全員が所属し、キャンパスライフの中心となる研究室の教員も、事務職員もわが子のように学生に接し

キャンパス環境とキャリア支援が相乗効果を生む

文理を超え、食、農、生物に関するさまざまな研究を行う4学科で構成される生物産業学部。無人島における海洋哺乳類の調査、寒冷地農場での農業実践、食品の開発製造、地域活性化に向けた調査といった実習、フィールドワークの数々も、生物資源に恵まれたこの土地ならではの。教育理念である「実学主義」を体現する環境で、社会に直結した生きた学問に4年間向き合うのだ。

就職活動時には、学生生活や研究で鍛えられた能力、人間性が人事担当者から評価されるといいます。専門性はもとより、コミュニケーション力やマナー、行動力、柔軟性といった

北海道で学ぶ4年間で 社会人として活躍する力を育む

東京農業大学 / オホーツクキャンパス

Tokyo University Of Agriculture

3キャンパス6学部22学科を有し、あらゆる農学分野をカバーする東京農業大学。そのうち生物産業学部があるのがオホーツクキャンパスだ。徹底した実学教育と大自然に囲まれた環境こそ、高い就職内定率の鍵となっている。

取材・文 / 堀水潤一

2016年度より実施
「榎本武揚フロンティア入試」



榎本 武揚
(1836~1908)

●募集人員
20名(生物産業学部全体)

●スカラシップ
本入試制度の合格者20名に対し給付。【Aランク／5名】入学金27万円&授業料半額(33万円)免除。【Bランク／15名】入学金(27万円)免除。

●出願資格
下記の1~4のいずれも満たす者。
1. 生物産業学部のアドミッションポリシーをよく理解し、北海道オホーツクで学生生活を送ろうという強いフロンティア精神・チャレンジ精神を持つ者が生物産業学部を第一志望とする者。
2. 平成29年3月高校(中等教育学校含む)卒業見込みの者および平成28年3月卒業の者。
3. オホーツクキャンパスのオープンキャンパスに参加もしくは個別訪問(要申込)した者。
4. 全体の評定平均値が3.3以上の者。

●応募から合格発表まで
エントリーシート提出→書類選考合格→出願→1次選考試験→2次選考試験→合格発表→入学手続

●来たれ北の挑戦者たち
本学建学の祖・榎本武揚先生は、オランダ留学を通じて「冒険は最良の師である」という格言を残しています。国際的な視点に立って地域活性化の実現を志す受験生のみならず、時代の先駆者であり、万能の人と呼ばれた榎本先生の精神、そして農大精神を継承し、北海道の大地で新たなフロンティアを築く学びを求め、ぜひこの入試に挑戦してください。

食の本場で学べた食品加工や商品開発



食品香粧学科／東京都・私立朋優学院高校
就職先・エバラ食品工業株式会社
葛 智耶 さん



食品開発に興味があり、日本の食糧生産の基地で学べるこの学科を志望。農家バイトで野菜をいただき、飲食店では厨房を任されるなど貴重な体験もできました。2年次には食品加工や製品化について通年で学ぶ「フードマイスター」プログラムに参加。苦心の未開発したメニューが一般向け試食会で不評だったのもいい経験です。この講座が縁で、食品メーカーに就職も決まりました。応用微生物学研究室ではミツバチの伝染病に効果のある乳酸菌について研究。担当の先生は熱い人で、卒論に追われている時期に、『君たちの研究データを卒論で終わらせず世界に問う論文にしたい』と言われ、心に火が着きました。世界の食糧生産に関わる研究であり、将来何らかの形で社会の役に立てば嬉しいです。

農家さんと良い関係を築き、頼られる存在に



地域産業経営学科／岩手県立盛岡第二高校
就職先・全国農業協同組合連合会 岩手県本部
津川 紘香 さん



地域に根ざした農業経営や流通について学ぼうと、北海道に関する予備知識もなくやってきました。実際に来てみると農産物や海産物を勉強するにはこれ以上適した環境はないことを実感。授業でいきなり乗馬を体験したことも印象に残っています。女子が少ない学科で最初は不安でしたが、みんな全国各地から集う仲間。すぐに打ち解けることができました。所属する戦略的マーケティング研究室では、生産者が真心込めて育てた青果物を最大限効率的に流通させる仕組みを考察。また、ゼミ旅行では各地の市場を見学するなど実地で学べました。卒業後は直接農家さんとやりとりする仕事に就きます。ここで磨いたコミュニケーション力と根性を活かし、良い関係を築いたうえで頼られる存在になりたいです。

Information

東京農業大学／オホーツクキャンパス



1891年、榎本武揚により東京農業大学の源流「育英農農科」創設。現在、世田谷キャンパス(応用生物科学部、地域環境科学部、国際食料情報学部)、厚木キャンパス(農学部)、オホーツクキャンパス(生物産業学部)の3キャンパス体制。教育理念「実学主義」を体現するオホーツクキャンパスの誕生は1989年。生物生産学科、アクアバイオ学科、食品香粧学科、地域産業経営学科の4学科体制。網走市街からバスで30分ほど。

●DATA
北海道網走市八坂196
TEL 0152-48-3814 (入試課)
URL <http://www.bioindustry.nodai.ac.jp/>

力も、こうした環境のもと自然に育まれていくといつていいだろう。そして、それを体系的なキャリア教育や就職支援で補っているのがキャリア課だ。オホーツクキャンパスでは、1年次に実施する「社会人基礎力診断テスト」で自身の強みと弱みを把握し、学生生活の目標設定を行うところからキャリア教育をスタートさせる。2年次の「キャリアデザイン」、「ビジネススマナー」、本格的な就職対策を行う3年次の「人間と職業」や「インターンシップ」などのプログラムも用意。特に個別面談に力を入れ、就職活動を控えた3年生全員に職員がアドバイザーを行っている。オホーツクで学ぶ学生の多くは首

都圏を中心に就職活動を行うが、その際、世田谷・厚木キャンパスでも面談や相談などのサポートを自由に受けることができる。「オホーツクも厚木も世田谷も一つの大学。キャンパスによる隔てはなく、オール東京農大です」と語るのは世田谷キャンパスの梶山孝泉キャリアセンター長だ。「覚悟を決めて入学したオホーツクの学生は、就活に対しても真剣ぶれないし決断力もある。個々の能力や経験値に加え、その覚悟が企業に伝わるからこそその内定率の高さだと思っています」と付け加える。またある学生は屈託のない笑顔で言った。「人間的な成長を期待するのなら、こんなによい場所はありません」。